「都会から漁業の世界へ！」～憧れの漁師になって～

平成１３年1月１１日
第４７回千葉県水産業青壮年女性活動実績発表大会にて発表
勝浦漁業協同組合　森川　良徳

１．地域及び漁業の概要

私が所属する勝浦漁業協同組合は、２２２名の組合員からなり、主な漁業は5～１０トン未満の漁船によるカツオ曳縄、キンメダイ立て縄、イカ釣り、カジキ延縄漁業、海士によるアワビ、サザエを対象とした採貝漁業、船外機船によるイセエビ刺網漁業などの沿岸漁業であります。　また、勝浦漁港には春と秋に県外の大型カツオ竿釣り船の水揚げがあり、カツオの年間水揚量は平成１１年度ではおよそ1万トン、水揚金額は４５億円にもなり、勝浦のカツオとして全国的に有名で、本県の水産業の重要な位置を占めております。

２．漁師を志した動機

　私は千葉市に生まれ、中学校を卒業するまで千葉市に住んでいました。私の父親は海釣りが大好きで、私も小さい頃から父親と一緒に外房へ海釣りに出かけていたので、海は大好きでした。
　小学校5年生のある夏の日、大原へ行ったときのことです。いつも乗る釣り船の船長（勝晃丸）が「明日、イセエビの刺網を揚げに行くから一緒に乗って漁を見てみないか」と誘ってくれたので、私は大喜びで午前1時半ごろに起き、2時半には船に乗ってイセエビ漁を見に行きました。船に乗ってしばらくすると、船酔いが始まり、何度も吐いてかなり辛かったのですが、まだ暗い中、網に掛かったイセエビが海の中から次々と揚がってくる姿を見ると、船酔いなんか忘れるほど感激し、また、船長たちが操業している姿を見て「かっこいい！」と思い、その時から、自分も漁師になってみたいという憧れを持ち始めました。

カツオ竿釣船の水揚げ風景

３．漁師になるまでの経緯

(1) 中学生の頃

　私の「漁師になりたい！」という気持ちは中学生になってからもずっと変わらず、中学2年生のとき、担任の先生に「漁師になりたい！」と相談しました。そこで、担任の先生に色々と調べていただき、千葉県には水産関係の高校が3校（銚子水産高校、勝浦高校、安房水産高校）あるので、一度行ってみてはどうかとアドバイスを受け、担任の先生の紹介で千葉市に一番近い、勝浦高校へ行ってみることにしました。
　勝浦駅に降りると、勝浦高校の漁業科（栽培漁業コース）の先生がわざわざ迎えに来てくださっていました。この時は、夏休みだったので、体験入学はできませんでしたが、漁業科の先生の案内でヒラメの飼育施設などを見学し、高校の授業の内容について話を聞きました。3年生のときにも、再度、勝浦高校へ行き、体験入学をしました。その時には、実習所で延縄の浮子の結び方を学ぶことができました。
　そして、担任の先生や両親と話し合って、私は勝浦高校へ行くことに決め、平成7年に生活推薦で勝浦高校の漁業科に入学することとなりました。漁業科には、船員を養成する漁業コースと沿岸漁業の後継者を育成する栽培漁業コースがあり、漁師になりたい私は栽培漁業コースを選択しました。

(2) 高校生の頃

　いよいよ勝浦高校へ入学することになりました。千葉市から2時間かけて通学するのは厳しいので、勝

浦市内にアパートを借りて一人暮らしをすることになり、漁業科の先生が高校のすぐ近くにアパートを見つけてくれました。
部活はバスケットボール部に入り、2年生の途中からレギュラーとなり、3年生はキャプテンとなりました。部活の友達を始め、家が漁業をしている人達とも仲良くなることが出来ました。高校の授業で特に楽しかったのは、スキューバダイビング実習と2泊3日の大島航海です。スキューバ実習では、海の生物の写真を撮ったり、鴨川漁港でクルマエビを放流したのが楽しい思い出です。大島航海では実習船に乗って、キンメダイの立て縄漁にチャレンジし、魚を捕ることの楽しさと難しさを学ぶことが出来ました。
中学生のときもそうでしたが、高校でも、友達や先生は、私が漁師になりたいと言うと「なぜ？」と非常に不思議がりました。特に、漁師の息子で、漁業のことをよく知っている友達からは、漁業の仕事のハードさ、休みが非常に少ないこと、収入が不安定であることなどを聞かされました。また、一人暮らしでは、掃除、洗濯、食事など全部自分でしなくてはならなかったので、辛い時期もありました。それでも、私は漁業に憧れていたので「漁師になりたい！」という気持ちが揺れ動くことはありませんでした。

(3) 漁師への道

高校3年生になったとき、担任の先生に「高校を卒業したら漁師になりたい！」と相談しました。小学生の頃に体験したイセエビ漁の印象が強くて「どうしても小型船に乗りたい」と担任の先生に言ったところ、先生は色々なことを心配してくれて「小型船は収入が不安定で、乗組員は縁故関係が多いからいきなり小型船を考えるのではなく、カツオ竿釣などの大型船の方が就職しやすいし、給料も固定給だから、まずは大型船に乗って、お金を貯めてから小型船に転換するのがいいのではないか」とアドバイスしてくれました。また、進路指導の先生からは「大型船から小型船に移るといっても、勝手が違うため、必ずまた一からやり直すことになる。本当に小型船に乗りたいのなら、遠回りせずに始めから小型船に乗ったほうが良いと思う」と言われました。
とりあえず、担任の先生の紹介で静岡県焼津のカツオ竿釣船の会社へ行き、話を聞きました。会社の方からは、「やる気があるのなら雇ってもいい」と言って下さったので、私は小型船にするか大型船にするか悩んでしまいました。でも、私の心からなぜか「小型船に乗りたい！」と言う思いは消えることがありませんでした。やはり大原で体験したイセエビ漁が衝撃的だったのかも知れません。散々悩んだ末、結局、カツオ竿釣船の話は断りました。
その後、進路指導の先生の知り合いで、新勝浦市漁協川津支所所属の小型船の漁師で、指導漁業士の天松丸を紹介していただきました。天松丸はすでに乗組員が4人いて、もうこれ以上、人を雇うことはできないということでしたので、がっかりしましたが、天松丸は「自分のところでは無理だから、知り合いの漁師に頼んでみる」と言ってくれました。そして、天松丸から、現在勝浦漁協の組合長であり、また指導漁業士である妙法丸を紹介していただきました。
妙法丸は、船長が組合長になって船を降りることになったため、乗組員が3人から2人になってしまいました。しかし組合長からは「最近は漁模様が良くなく、将来を考えると、もう一人雇うのは厳しい。また、今は、魚が昔ほど捕れず、しかも魚価が下がっているため、収入の増大は期待できない。そのため、乗組員に払う給料は安く、朝は早いし、仕事も辛い」と言われました。でも組合長は「こんな状態でも、本当にやる気があるのなら雇ってもいい」と言ったとき、私は躊躇なくその場で「乗らせて下さい！」とお願いしました。
ただ、進路指導の先生は、給料と住居について非常に心配していたので、組合長に生活できる最低限度の給料の保障と市営の漁民アパートへの入居を要望しました。その結果、給料は10万円の固定給プラス歩合制、漁民アパートへの入居については、本当は妻帯者しか入れないところを、組合長が勝浦市役所に何度もお願いして、漁民アパートに入ることができるようになりました。

私のパートナー「妙法丸」

漁民アパートへ引っ越しするときには、妙法丸の船長が、わざわざ勝浦漁協の青年部に協力をお願いして、青年部が10名ほど来てくださり、進路指導の先生、船長と組合長の奥さんにも手伝っていただきました。
ちなみに、私の父親は、私が漁師になることについては「息子の決めたことだから」と賛成してくれました。母親は、漁業は収入が安定しているとは言えず、また、仕事がハードなので、漁師になるのをあきら

めて、高校を卒業したら実家に帰ってくるだろうと思っていたそうですが、母の予想は見事にはずれました。今でも母親は「まだ帰ってこないの？」と言うことがあります。

4．漁師になって

三陸沖でのカジキ延縄

私の初漁は、平成１０年4月のカツオ曳縄漁になりました。初めての漁はとても緊張しました。とにかく、カツオが掛かったら、無我夢中で縄を引き揚げていたような気がします。船に弱い私ですが、この日は船酔いすることもありませんでした。漁が終わると、緊張の糸が切れて、疲れがどっと出ました。

さて、私の乗船している妙法丸は、3月から5月はカツオの曳縄、6月から9月は八丈島沖でのキンメダイ立て縄、１０月と１１月は三陸沖まで船を走らせ、カジキ延縄を行い、１２月から3月は地元にもどって、カジキ延縄を行っています。 妙法丸は船長、機関長と私の3人乗りで、船長、機関長ともにとても優しい人で、漁のこと、魚のことなどをとても丁寧に教えてくれます。漁業の世界は職人気質で、怒鳴られたりするかと思いましたが、全くそんなことはありませんでした。

妙法丸が行っている漁で、私が一番おもしろいと感じるのは、カツオ曳縄漁です。カツオ曳縄は疑似餌（角）を船で曳く、いわゆるトローリングで、遠いところでは、八丈島沖まで片道１０時間もかけて行くこともあります。カツオの群を探し、釣るのにずっと走っているため、船酔いすることはなく、釣れるときはどんどんカツオが釣れるので、あっと言う間に時間が過ぎてしまいます。また、昼食で食べる釣りたてのカツオの刺身は格別です。

カジキ延縄の漁具を作成

対に、大変な漁はカジキ延縄漁です。この漁だけは、今でも船酔いすることがあります。カジキ延縄は、餌のサバを釣るのに、遠くは銚子沖まで行くことがあるので、早いときには午前2時に出港します。餌取りは午前9時には終了させ、それからカジキの漁場へ行きます。カジキの漁場は、近いところで勝浦から１２～１３マイルですが、遠いときには１００マイルにもなります。カジキ延縄の長さは２０kmに及ぶため、投縄に1時間半かかり、揚縄には3時間から5時間もかかってしまいます。帰港は漁場が近くても夜の9時頃で、遠いと夜中の1時頃になってしまうため、操業が続くと寝る暇がなく、体力勝負になります。

漁業は想像していたとおり、仕事はとてもハードで、休みはあまりありませんでした。体力的にも精神的にも辛い時期はありましたが、大漁のときや大物のカジキやメバチマグロが釣れたときには大感激して辛さを忘れてしまいます。さらに私が漁師になるのに協力して下さった人たちのことを思い浮かべると「ここでくじけている訳にはいかない！」と思い、ここまで頑張ってまいりました。また、勝浦漁協青年部の人たちには、私が漁業の世界に入ったとき、温かく迎えていただきました。特に、私と同年代の人たちとは非常に仲良くなり、休みの日には一緒に遊びに行くこともあり、寂しく思うことはありません。今では、漁師言葉もしっかり身につきました。

5．将来の目標

私は漁師になってまだ3年目ですが、将来は、自分で船を持って、自分の腕で稼げる漁師になるのが今

の目標です。そのためには、魚のこと、海況のこと、天気のことなどたくさん学ばなければなりません。そのためにも、船長、機関長から積極的に漁に関するイロハを吸収していきたいと思います。また、平成12年、やっと准組合員になることができたので、早く正組合員になれるよう、頑張りたいと思います。

平成12年6月11日に、海の幸に感謝する会、ウーマンズフォーラム魚（WFF）主催の「世界中で考えよう、海と食卓のサスティナブル・ユース」（持続可能な資源の利用）というシンポジウムに「勝浦の漁師」という立場で、パネリストとして出席し、WFF代表の方、水産を学ぶ大学生3名、そして水産関係に関心のある女優の方と持続可能な資源の利用について色々と話し合い、みなさんの水産における知識と関心の高さ、漁業にかける期待に圧倒され、自分はまだまだ勉強不足だと痛感しました。今後もこのような機会があれば、積極的に参加してみたいと思っています。

シンポジウムのパネリストとして出席

6．最後に

漁業の世界は、思うようには収入が上がらず、漁業経営は年々厳しくなっていますが、今、都会で暮らすより、自然とともに暮らし、仕事をしたいと思う若い人は少なからずいると思います。今後、漁業の道に進みたいという若い人達が、漁業の世界へ入れるような道があれば、漁業の世界にも若い人がもっと増えてくるのではないかと私なりに思います。

私は、小さい頃から「漁師になりたい！」という希望をずっと持ち続けていました。さまざまな障害がありましたが、多くの人達に支えられて、幸運にも漁業の世界へ飛び込むことが出来ました。そして、高校生のときに、何でも話し合える仲の良い友達が出来たからこそ、寂しくて、実家が恋しくなることなく、ここまでやってこられたと思います。漁師になって今思うことですが「**やる気があれば、道は必ず開ける！**」ということです。どんな困難なことがあっても「漁師になりたい！」という思いをあきらめることなく、実現へ向けて行動していったからこそ、今があると思います。　海が大好きな私にとって、自然を相手に仕事ができることは、この上ない喜びであり、また、気候の穏やかな日に、見渡す限り海のところで、漁をしているときの平穏さと爽快感は、漁業をする者でしか味わえないことであると思います。

最後に、私が漁師になるのを支えて下さった中学校時代の担任の先生、勝浦高校の担任の先生、進路指導の先生、天松丸、勝浦漁協の組合長、そして私を漁業の世界へ送り出してくれた両親に感謝いたします。